

白百合女子大学 博士論文審査報告書

氏 名	岩崎 衣里子
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	甲第 47 号
学位授与年月日	平成 25 年 12 月 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学位論文名	主 題 絵本の読み聞かせによる母子相互行為が子どもの語い発達に及ぼす影響 副 題 ～子どもの社会情動的発達との関連から～
論文審査委員	委員長 教授 高橋 博史 主 査 教授 田島 信元 副 査 教授 宮下 孝広 教授 鈴木 忠 准教授 高橋 貴志

論文内容の要旨

本研究は、乳幼児期の絵本の読み聞かせによる母子相互行為が子どもの語い発達に影響するプロセスを検証することが総合的な目的であった。具体的には、絵本の読み聞かせを「読み聞かせ場面」と、読み聞かせの短期的な成果が見られる事後の「展開場面」の 2 つに分け、それらの場面における母子相互行為の発達的变化、および母子相互行為が子どもの社会情動的発達を介して語い発達へ与える影響、という 2 点分けて実証的に検証することを目的としている。

先行研究の吟味を通して、これまで、読み聞かせの子どもの語い発達への影響についての研究には、読み聞かせ時の子どもと母親の双方の発話と行動の分析、とりわけ子ども自身の短期的変化の分析が欠けており、読み聞かせがどのように子どもの語い発達に影響していくのかのプロセス・モデルは提案されてこなかった。そこで本研究は、トレヴァーセトレヴァーセンらの先行研究とヴィゴツキー理論に基づき、読み聞かせ活動における母子相互行為を通して生起する子どもの社会情動的活動と子どもの自己内対話活動が語い発達に関連しているのではないかと考え、「絵本の読み聞かせによる母子相互行為が“母－子－絵本”の 3 項関係を作り、そこでの子どもの社会情動的活動を通して対人関係を成立させ、その過程で対人的な言語活動の内面化に基づく自己内対話活動が促されることで子どもの語い発達へとつながっていく」というプロセスを仮説立てた。

そしてこのプロセスを検討するため、研究 1 においてまず絵本の読み聞かせ場面とその後の展開場面における母子相互行為を検討し、研究 2 において絵本の読み聞かせ場面とその後の展開場面を通して、母子の相互行為が子どもの社会情動的発達を介した語い発達へと関連していくプロセスを検討した。そして研究 3 のケースの縦断データによる質的分析により研究 1 と 2 の横断データより得られた数量的分析の結果の補完を行った。

それらの結果は以下の通りであった。研究 1 では、0 歳から 6 歳までの子どもの年齢を、乳児前期（0 歳）、乳児後期（1 歳）、幼児前期（2、3 歳）、幼児後期（4、5、6 歳）の 4 段階に分け、絵本の読み聞かせ場面と展開場面において、母子相互行為がどのように発達的に変化しているのかを横断的に検討した。その結果、2 つの段階を経て母子相互行為のあり方が変化することが明らかになった。まず乳児前期においては、読み聞かせ場面、展開場面ともに母子の一体感を楽しむための絵本を介した母子の情動共有場面が優勢であり、乳児後期では、読み聞かせ場面におい

て母子の情動的相互行為を介した子どもと絵本との相互行為、すなわち 3 項関係が成立することが示唆された（第一段階）。そして幼児前期においては、読み聞かせ場面での母子相互行為（3 項関係）のもと、読み聞かせの直後の展開場面において読み聞かせ場面で学んだことが表出されるようになり、さらに幼児後期においては読み聞かせ場面、展開場面双方において、“母—子—絵本”の 3 項関係でのやりとりから学んだことを子ども自身が自発的に表出していくという、子ども中心のやりとりになっていることが示唆された（第二段階）。

研究 2 では、母子相互行為の発達段階ごとの読み聞かせ場面と展開場面において、「絵本の読み聞かせによる母子相互行為が子どもの社会情動的発達を促し、対人関係を成立させ、対人的言語活動の内面化と考えられる子どもの自己内対話活動（Vygotsky, 2001）が活発になることで、語い発達へと関連していく」プロセスを横断的に検討した。その結果、第一段階（0 歳，1 歳）の読み聞かせ場面によって情動を伴った身体動作的な母子相互行為によって母親が足場作りをする（Bruner, 1988）ことで 3 項関係の土台が作られ、それを子どもは自分のものとして取り込んで専有（Wertsch, 2002）する。その専有したものをさらに子どもは発展させ、展開場面において表出していることが示唆された。この第一段階をベースに、第二段階（2，3，4，5，6 歳）の読み聞かせ場面においてさらに情動的な母子相互行為が深められ、子どもの自己内対話活動が促進され、展開場面において子どもの表出言語へとつながっていることが示唆され、仮説としてあげた絵本の読み聞かせが子どもの語い発達へと影響を及ぼすプロセスは、「母子相互的な絵本の読み聞かせによって、子どもの社会情動的な対人関係が成立し、その過程で、子どもの自己内対話活動が起こることで子どもの表出言語が促される」という形で支持された。

研究 3 では、0 歳から 3 歳に焦点をあて、横断データの分析結果である研究 2 で得られたプロセスを 1 事例の縦断データをもとに、絵本の読み聞かせ場面と展開場面においてより詳細に検討した。その結果、子どもが 0 歳のころより母親は、読み聞かせ場面において、子どもの表象の操作を促す言葉かけやジェスチャーを通した情動調整的な働きかけ（須田，1999）や、子どもの言語行動の足場作りとなるフォーマットを形成しており（石崎，1996）、展開場面においても母親はコミュニケーションの手段として質問行動の多発を通して子どもの語い獲得を促す足場作りを行っていることが示唆された。それに対し、子どもは母親の意図に気付き始めており、展開場面において情動調整行動によって応答していることが示唆された。そして 1 歳の読み聞かせ場面において自己内対話活動が見られ始め、展開場面においてさらに自己内対話活動が活発になっており、そのような母子相互行為をベースとして、2 歳の読み聞かせ場面から言語的なやりとりが生じし、さらに絵本の内容をより子どもに理解させるための母親の質問行動が出現することで、子どもの思考活動である自己内対話活動も活発におこなわれていることが示唆された。このように読み聞かせ場面で母親の行動をいったん取り込んで自分のものとし、専有する（Wertsch, 2002）ことで、展開場面でそれを言語的に表出させていることが示唆された。これらのことから、横断データで得られた第一段階から第二段階へ移行する発達過程と同様な結果が得られたと考えられ、「母子相互的な絵本の読み聞かせによって、子どもの社会情動的な対人関係が成立し、その過程で子どもの自己内対話活動が起こることで子どもの表出言語が促される」というプロセスが、縦断データによってより詳細に示されたものと捉えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究の評価ポイントは、以下の 4 点にまとめられる。

（1）これまでの、絵本の読み聞かせと子どもの言語発達に関する心理学研究の多くは、絵本の読み聞かせ場面を母子相互行為と捉えられていながらも養育者の発話に焦点があてられており、母親の発話や行動が子どもの発話や行動にどのように影響し、子どもの語い発達へと関連してい

るのかというプロセスは捉えられていなかった。Ninio(1983)や石崎(1996)の研究では、絵本の読み聞かせ場面において母親はコミュニケーションを通じて子どもの語い発達を促すフォーマットを作ると主張しているが、母親のフォーマットが、直接子どもの語い発達に影響しているとは考えにくいのである。それに対し、本研究においては、母親の発話や行動のみならず、それが影響する子どもの行動や発話も明確にしていることから、絵本の読み聞かせを母子相互行為として実証的に捉えていること、その上で、絵本の読み聞かせによる母子相互行為が子どもの語い発達に及ぼす影響過程を、先行理論をもとに、「読み聞かせによる母子相互行為が、子どもの社会情動的発達を促進した上で、その過程で自己内対話活動が促進されることを通して子どもの語い発達に影響する」という影響プロセスに関する仮説を立て、最終的には因果関係を推定する高度な共分散構造分析の手法を使って実証的に検証している。この点は、本研究の最大の貢献で、語い発達につながる読み聞かせのあり方の詳細な情報を提供するとともに、単に“読み聞かせれば語い発達を促す”のではない、という知見は実践的にも有用性の高いものと考えられる。

(2) 読み聞かせが子どもの言語（語い）発達に影響を与えることは Ninio & Bruner(1978)の研究などから明らかにされているが、言語発達のどの側面に影響を与えているということは明らかにされていなかった。本研究では、言語発達の領域には「理解言語」「表出言語」「概念」の3つに分類されるという知見のもと（大村ら，1989），絵本の読み聞かせによる母子相互行為が子どもの「理解言語」「表出言語」「概念」のどの側面に影響を与えているのかを検討し、絵本の読み聞かせによる母子相互行為は、最終的に子どもの「表出言語」に影響を与えているという結果を得ており、語い発達をより詳細な側面で捉えるという観点から、新知見を提出している。

(3) これまでの研究では、扱われた子どもの対象年齢が0歳から4歳までが大半であり、しかも0歳から4歳まで通してみたものは殆どなかった。本研究においては、幼児後期の子どもの語い発達の特殊性（秋田・無藤，1996）をみるため、5歳以上の子どもの発話や行動にも焦点をあて、0歳～6歳まで年齢の幅を広げ、さらにその間の全年齢を通しての検討がなされており、第一段階から第二段階に渡る発達的变化を捉えることができている、新知見として評価される。

(4) これまでの研究では、殆どが読み聞かせ場面のみが分析の対象となっていた。しかし本研究では、読み聞かせが子どもの行動の変化に与える影響をみるためには、絵本の読み聞かせ場面だけでなく、その後の展開場面も視野にいれなければ、子どもの行動の変化をみることはできないのではないかと考え、絵本の読み聞かせ場面とその後の展開場面とを設け、それらの場面での母子相互行為がどのように変化していくのかを検討した。その結果、読み聞かせ時は比較的黙って聞く（思考しながら聞く）ようになる第二段階においても、絵本の読み聞かせによって得られたものをその後の展開場面を通してみることができ、ヴィゴツキー理論に基づく「自己内対話」現象を実証的に明らかにしている。この点も有用な新知見となると考えられる。

以上により、審査委員会は本論文が博士（心理学）の授与に値するものと認めた。